

「ちよつと急用ができたようで、『お昼の約束をしていたのに残念だ』と言っていましたよ。この店に電話で、遠くのお孫さんが急に帰省したとの知らせがきたので」

「そうですか」

美沙は自分の肩の力がすつと抜けていく感じだ。

「よかつたら、こちらで一緒に」

男性は美沙の様子をうかがうようにして、前の席をすすめてくれた。

「はい」

そう返事をしなければならぬような気がして、小さな声でうなずき、椅子に浅く腰を下ろした。

「申し訳ないと気にしていましたので、くれぐれ

もよろしくとのことでした」

「そんな」

「ちよつと私が居合わせたので、伝えてほしいと頼まりました」

「そうですか。それで待っていてくれたのですか」

待ち合わせの人がいないからといって、今更、店を後にするような、みつともない真似はできない。い。

「よかつたら一緒に」

今度の「一緒に」はランチのことだろう。

強いて断る理由もない。

しかし、一度、それもほんの少しだけ、顔を合わせた男性と同席となると、美沙にはそんな作法の

心得がない。

長い間、男性と向かい合って仕事をしてきた

はずの美沙でも、親しくもない人と食事を共にするのは億劫だ。お茶だけの時間なら何とか取り繕うことはできるが、食事となるとどうしたも

のか。美沙の心の内を知ってか知らずなのか、

「少し早いです、お昼にしますよ」

すかさず声をかけてきた。

「ええ、はい」

思わず頷く。

「じゃ私もランチにしますから」

穏やかな声で言う。美沙もやつと落ち着いてきた。

何の魂胆もなく夫についた嘘が、こんな事態

になってこようとは美沙自身も想像さえしてなかった。少し後ろめたさを感じ始めた。

「タイム・ランチにしますか」

押しつけがましいわけではないが、だんだんと男性のペースで事がはこんでいくようだ。

男性が美沙の分までも注文した。

「あの方は、何の先生ですか」

そうだ、いい潮時に出会ったようなものだ。この際、確かめてみよう、気持ち弾んできた。

「先生ですか。私の中学の先生ですよ。あれからずつと六十年。今もやっぱり先生は先生です」  
「そうですか」

六十年も！美沙の生涯全てだ。

しかし、何で。一寸言い様が年恰好に似合わない気がする。

「学校を出たばかりの最初の教え子なんです、私は」

男性が滑らかに喋る。

「私は、当時陸上部だったので、先生には特別にお世話になって、今もずっと」

男は急に話を止めて頭でも掻きそうな表情を見せた。

「いやいやすみません。突然自分の話をはじめて。名前さえ言っていないのに、私は三好良夫、良い夫です」

照れくさそうにあわてて頭を下げた。案内

名前の通りいい人かもしれない。

「中野美沙です」

美沙も同じように頭を下げた。

「そうですね、中野さん。先日先生にそう言っていましたよね」

「ええ」

美沙は短い返事で済ます癖がある。

「お待ちどうさま」

焼き塩さば、ナスとピーマンの味噌いため、そしてスライスしたトマトとグリーン・アスパラが陶器の大皿に色よく盛られたランチが運ばれてきた。料理が皿の中で行儀よく微笑んでいるみた

いだ。

男性は美沙に、さあどうぞ、とばかりに手を広げ少年のような無邪気さで、

「いただきます」

と、声を弾ませた。

男性の仕草に應えるように美沙もぺこりと頭を下げ、箸を手にした。好みの味付けに食は進む

男性のどことなく品のある振る舞いが、美沙をすっきり安心させた。

「この店の食事はなかなかいいでしょう。この店主がまた、先生の最後の教え子なんですよ」

「そうですか」

そうなのだ。この和む雰囲気は、この店が小さな

同窓会なのだ。なるほどと納得させられた。

自然が育んだ野菜を色よく取り入れ、香りまでもが美味しい。こんな料理をつくっている人の人柄が窺える。厨房の中にいるので顔は見えないが、何となく今一人の教え子が想像できた。

食後、口に行っている珈琲の香りと同じように、男性の話は柔らかい口調だ。真っ直ぐに、老女をいつまでも先生と呼び、尊敬しているこの男性を、美沙は好ましいと思えてきた。

「ずい分長くお付き合いが続いているんですね」  
美沙は先程の話の続きを聞きたくなくなった。どんな関わりがあれば六十年もの親しみが保たれるものなのか。

「いや、私は今回、二週間くらい帰省しているんです。神戸に住んでいるんですが、親の残し物の整理やらで、年に何回かこちらと神戸を往來しています」

手元にカップを置き、美沙に語りかけた。気分いなんて一かけらもない淡々とした口調だ。

三好良夫は、中学までを瀬戸内海の島で育つたと言う。

「えっ、あの栗島ですか。海員学校のあったあの島」

父は東隣の志々島出身だった。何か懐かしさこみ上げてきて思わず（父も島出身ですよ）と言おうとしたが口をつぐんだ。話の腰を折りそ

うだ。

「ええ、そうですね。先生もその島へ、当時女としては珍しい体育の先生として赴任してきたんですよ」

八十歳を過ぎていっているのに身のこなしが軽いのも頷ける。

そして、三好は自分がかつて長距離の陸上選手で、それでも今にピッチの速いスピードが求められるマラソンになるから、走ることは趣味だけにして、将来を見据えた進路を選びなさい、との助言を先生から聞いて違う道へ進んだことなどを、親しみのある笑顔で、

「長い話になりますが」

えた。

「ただ練習量の多さに、学業の成績はつるべ落としでした。私はマラソン選手になりました。悩み、思い余つて島に戻り、先生に悩みを打ち明けたのです」

真剣な顔だ。

「先生は一言のもとに断じてくれました。『これからはスピードマラソンです。あなたのような耐久型の走りでは大成しません』と」

「えっ。そんな、そんなことはつきりとおっしゃったんですか」

「はい、その後二、三年でマラソン界は貞永選手から中尾へすっかり様変わりして、先生の予言は

と前置きしてから語り始めた。

「私はこれでも、一時、県内で陸上五千メートル走の記録を持っていたんですよ」

笑い顔には自慢顔の気配はない。

「中学校に入つて直ぐ、それまでいつも運動会では人の背中ばかりを見て走っていた鈍足の私が、千五百メートル走で初めて一番になりました。長い距離を走るとは強いのだと初めて気づき、夢中になりました」

三好はつばを飲み込みまた話を続けた。

「高校へ進んでも勝ち続け、高校二年でインターハイの優勝と記録までものにしたんです」

確かに足が長く、そんな実績は美沙にもうかが

見事みごとの中なかしました」

美沙みさはマラソンのことはよくわからない。

「先生せんせいの余あまりにもはっきりした言葉ことばに、お陰かげで進路しんろを誤あやまらなくてすみ、今日こんにちがあるというわけです」

美沙みさはどこか首くびを傾かたむけたくなる思いおももする。

「確かに三好みよしさんの進路しんろは示しめしてくださいましたよね。けどひとつの才能さいのうを否定ひていされたんですよ。感謝かんしゃが六十年ろくじゅうねんも続つづくものなんでしょうか」

三好みよしは頷うなずきながら微笑ほほえんでいる。

「私わたしには今いまでもインターハイのアナウンスが聞きこえるんですよ。『高校新記録こうこうしんきぎろくです。三好良夫みよしよしお』心地こころちよく響ひびくのは転身てんしんのおかげおかげだと思おもっています。

私わたしにもスポットライトが一度いちどは当たあったんだ。当あ

たったまま終わおることができた。その記憶きおくはしょうがい、わたし、だから生涯しょうがいの私の宝たからなんです。それをつくってくれたのは先生せんせいですよ」

美沙みさは、この老師弟らうしていの真まの鮮あざやかなつながりがどうにか理解りかいできた気がする。

自分じぶんにはそんな、宝たからほどの記憶きおくがあるだろうか。あるならば確かにことあることに抱だきしめているだろう。思い当おもたりそうにもない。

「初めてですよ。人ひとにこんな話はなしをしたのは」

三好みよしはホツとしたような顔かおで、カップに残のこっていた冷めた珈琲コーヒーを二氣いっきに飲み干ほした。

(以上6月4日放送分)